

オピニオン

AMD A 海外レポート

M7.8から2年進まぬ復興

急増の精神疾患対応



2 ネパール

AMD Aネパール支部長

ヨゲンドラ・プラサッド・シン 医師(56)

「ドーン」という大きな音。土とれんが造りの建物が大きく揺れ、一瞬にして崩れ落ちました。土煙で視界がさえぎられ、「助けて」という悲鳴があちこちで聞こえました。

2015年4月25日、ネパールを約80年ぶりに襲ったマグニチュード7.8の大地震は死者8897人、負傷者2万人以上、建物全壊53万棟、半壊28万棟(15年6月、ネパール政府発表)と甚大な被害をもたらしました。

AMD Aネパール支部は直ちに被害を本部に報告。翌26日にはスタッフが派遣されました。余震が5分おきに続く中、AMD Aは首都カトマンズ周辺と、東に70km離れた被害の大きい地域で巡回診療に取り組みました。

地震後には、急増した精神疾患患者に対応するため、日本、ネパールの両医師会と共同で医療従事者400人に



ネパール大地震被災者の治療をするAMD Aスタッフら(2015年)

上に心理カウンセラー養成講座を行いました。ネパール支部は感染症予防のため、首都から88km西のゴルカ郡で公立学校2校のトイレを建設しました。地震が原因で障害者となった人も多く、AMD Aの日本人理学療法士がネパールで車いすを製造し、提供しています。

地震から約2年たちましたが、いまだに多くの住民がトタン屋根の仮設住宅やテント暮らしを強いられています。17世紀に建てられた世界遺産の旧王宮と寺も壊れたままです。

復興の妨げとなっているのが国内情勢です。08年に王制が廃止され、15年に民主化を目指す新憲法が公布されました。しかし、政治的権利の擁護への不安をめぐる南部住民の反対などにより、国が復興に全力を尽くす状況にありません。NGOが学校や住宅を建て、食糧や衣料、医療サービスを提供していますが、

被災者に十分に届いていないのが実情です。

ネパール人は穏やか、まじめ、正直で日本人と似ています。祭り好きで月に1回程度、夜を徹して歌い、踊ります。こうした住民交流が信頼感を生み、132の民族の仲の良さを誇りとしています。

AMD Aネパール支部は、国内で総合病院など三つの病院を運営し、経済的に恵まれない住民には安い医療費で治療しています。

「医療のプロとして、恵まれない人々に助けの手を差し伸べたい」。私がAMD Aに加わったのは極めて人道的な理由でした。地元の意向を尊重した支援を行うAMD Aの「ローカルイニシアチブ」こそが私たちの底力であると確信しています。昨年、支部創設25周年の式典を行いました。あらためて責任の重さを痛感しています。



ネパール 中国とインドの国境に位置し、人口約2700万人。面積は14.7万平方km。で北海道の約1.8倍。ヒンドゥー教徒が全体の約80%を占める。外交方針は非同盟中立。就労人口の67%は農業に従事。経済面の主要援助国はインド、日本、英国など。AMD Aネパール支部は1989年発足。首都カトマンズにあり、スタッフは15人。